

# ローマ7巡礼聖堂をめぐって

愛媛大学法文部教授

山川廣司

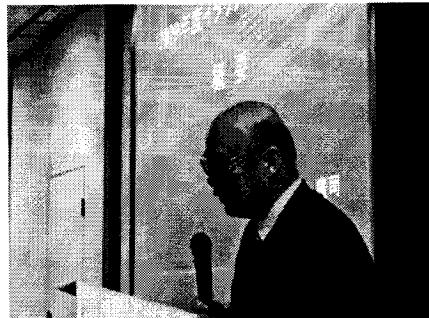
## はじめに

今回ローマ巡礼の調査報告ということで、「ローマ7巡礼聖堂をめぐって」を表題としたが、本稿では古代から連綿と続くローマを一縷めに述べることは難しいので、キリスト教の出現を境に2つの時期に分けて述べたいと思う。第1期はローマ共和政期から帝政にかけての多神教の時代で、キリスト教が公認される以前の古代ローマである。第2期はイエスの死後、使徒たちによって迫害されながらも布教活動を行い、ついに313年にコンスタンティヌス帝によってキリスト教が公認され、さらに392年にテオドシウス帝により国教となり、以後、帝政末期、中世を経て現在に至るまでローマ・カトリック教会の中心として重要な役割を果たしているキリスト教世界のローマである。

## 1. キリスト教以前の宗教と巡礼

### (1) ローマのアスクレピオス巡礼

最初にキリスト教以前のローマ巡礼について述べたい。筆者は古代ギリシアの巡礼で「四国遍路と世界の巡礼」共同研究プロジェクトに関わってきた。これまでギリシアのエピダウロスで崇拜された医神アスクレピオスの聖地巡礼について考察したが、そのエピダウロスから分祀された聖所アスクレピエイオンがローマのティベリナ島にある。紀元前3世紀にローマで疫病が流行した時、この島の東側にアスクレピオスを迎えて、そこで治療をしてもらったのが起源である。19世紀の銅版画（図1）によると、島自体が船の形をしており、手前が教会で、後ろの方が病院である。なぜ船の形をしているかというと、ギリシアからアスクレピオスを船でローマに迎えたということを象徴しているからだそうである。幸い島で隔離されているので、病人を収容するという点では非常に場所的に良かったということもあって、以後ティベリナ島が治療の場となって、16世紀にはここに病院ができ、現在は教会と病院が建っている。逆方向から見た図2は手前の建物が病院で、奥の方に見えるのがサン・バルトロメオ教会である。その前庭にはオベリスクが船のマストのように立っている。中洲のところでティベリ川が左右に分かれているのだが、ここで川の流れが急となり、河口から遡上して来た船も積荷を降ろさなければならなかつたことから、ティベリナ島近辺が都市(civitas) ローマの発生した所とされている。



報告中の筆者



1. 19世紀以前のローマのティベリナ島。ジョゼフ・バティスター・ビラヌーベ（1707-73）の銅版画。画面は石壁にはめこまれたアスクレピオスの神像（施術中供奉）をじくに着調して描いてある。

図1 銅版画（出典：『医神アスクレピオス』15頁）

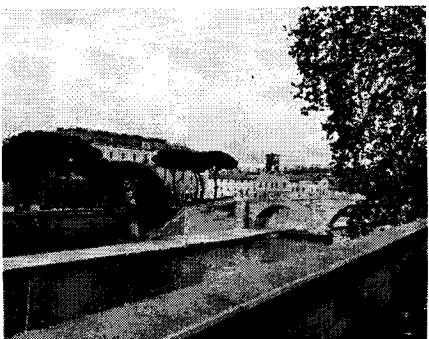


図2 ティベリナ島（以下写真は筆者撮影）



図3 蛇が絡む杖とアスクレピオス像

その場所に病いの治癒を求めて各地から多くの巡礼者が訪れたのであった。教会の裏手の崖が船形になっていて、側面の石組みに杖が描かれ、その杖に蛇が絡み付いて、その横に顔面は削られているが顔の輪郭が残っている人物像、これがアスクレピオスである（図3）。このように、ギリシアのエピダウロスから招聘して造られたアスクレピエイオン（アスクレピオスの聖域）が残っているし、その上に現在も病院がある。ただ教会は10世紀にアスクレピエイオン跡地に建てられたものであり、ファーテベネフラテッリ病院も16世紀に建てられたものであり、直接アスクレピオスと繋がるものではないが、今回は古代ローマの巡礼地として、壁面に刻まれたアスクレピオス像の確認を行なった。

## （2）多神教の古代ローマ

一神教であるキリスト教に対して、古代ギリシアもローマも多神教の世界である。それはギリシアではゼウス、ローマではジュピターを主神とする宗教で、それぞれの神々の神殿が建てられ、崇拜されていた。それと並行してローマでは帝政期に入って国家宗教として皇帝崇拜が行われ、それを拒否したキリスト教徒が迫害されたことは有名である。

カンプス・マルティウス（マルスの野、*Campus Martius*）と呼ばれる7つの丘をもつ湿地帯が都市ローマの起源になっている。その1つであるカンピドリウムの丘には、ユピテル

（ゼウス）、ユノー（ヘラ）、ミネルヴァ（アテナ）の3神を祀った最善最高のユピエル神殿が聳え、その麓にフォルムがあり、ここが現在のフォロ・ロマーノである。共和政から帝政にかけて、このフォルムにおいて、元老院を中心に政治の駆け引きが行われ、エミリアのバシリカは金融の要として経済の中心を担い、ユリウスバシリカでは裁判が行われた。また農耕の神のサトゥルヌスに捧げられた「サトゥルヌスの神殿」をはじめ、多産と繁栄を願って炉の女神ヴェスターに捧げられた「ヴェスター神殿」、ハドリアヌス帝がヴェヌス（ヴィーナス）とローマの女神に建立した「ヴェヌスとローマの神殿」、さらには暗殺されたユリウス・カエサルのためにアウグストゥスが建てた「ユリウス・カエサルの神殿」などが建ち並んでいた。

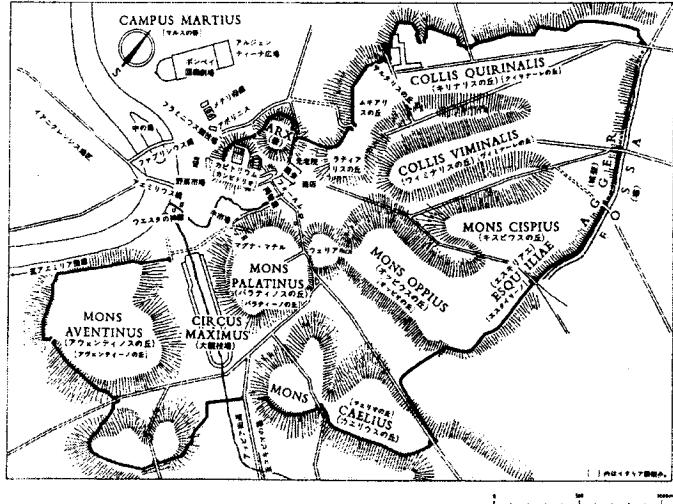


図4 ローマ中心部の7つの丘（出典：『図説都市の世界史1古代』141頁）

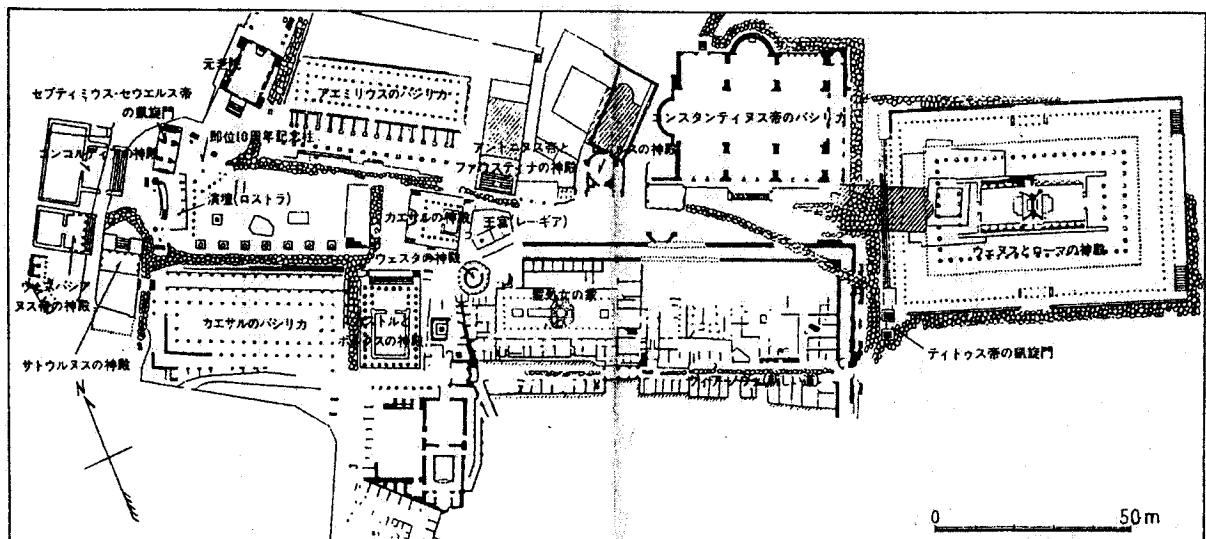


図5 フォロ・ロマーノ遺跡平面図

またフォルムでは外征で勝利したローマ軍の凱旋式が行われ、日常では人々が集まって儀式を行ったり、集会を開いたりと公共生活の中心として繁栄した、都市ローマの心臓部だった。そこで多神教を信奉するローマ人は、それぞれの神に捧げ物などを行って現世での利益を願い、祈願した。

それからもう一つは、巡礼とは直接結びつかないかも知れないが、「全ての神々」を意味するパンテオン（Pantheon）である。それはローマの神々を祀る神殿としてアウグストゥスの側近アグリッパによって27年BCに建てられたが、80年に火災で焼失し、118年にハドリアヌス帝によって再建された。

円柱形の上に円蓋クーポラが載っており、頂上にはオクルス（目）と呼ばれる採光部があり、その入口正面には16本のコリント式列柱が並んでいる。内部には7つの壁龕が設けられていることから、元々はユピテルをはじめ7至上神が祀られていたといわれているが、608年にビザンツ皇帝フォカス帝から教皇ボニファティウス4世に献上され、聖母と殉教者を祀る教会となつたため破壊を免れた。今日では国家に貢献した功労者を祀る場所として、ラファエロ、初代国王ヴィットリオ・エマヌエーレ2世、ウンベルト1世の墓などがある。このようにキリスト教以前のローマは多神教の世界であり、国家宗教として皇帝崇拜なども行われていた。



図6 パンテオン正面

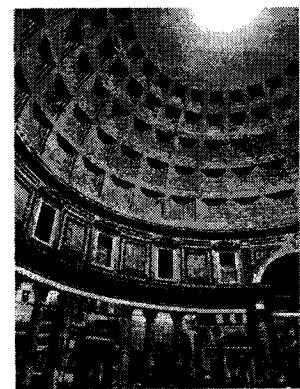


図7 パンテオン内部

## 2. キリスト教とローマ巡礼

上述のように、フォロ・ローマーノにはたくさんの神殿があり、多神教の神々を祀っていたが、313年にコンスタンティヌス帝がキリスト教を公認し、さらに392年にテオドシウス帝がキリスト教を国教にした結果、立場が逆転して、従来のローマのこのような神々の神殿は破壊されるか、キリスト教の教会に改修されるような形で残存することとなった。以下ではキリスト教世界となったローマについてみていくたい。

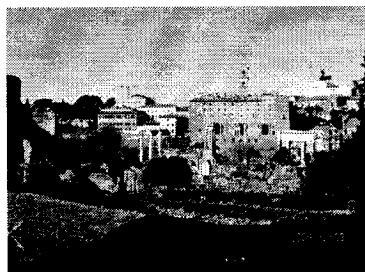


図8 ウェヌス神殿からのフォ

現在サン・ピエトロ聖堂があるヴァチカンは、世界のカトリック信者の頂点に立つローマ・カトリック教会の総本山である。図10を見ていただきたい。これは4、5世紀ローマおよび近郊における聖堂・カタコンベの分布地図だが、これから述べる教会の場所の確認をしたい。番号22番がサン・ピエトロ聖堂（サン・ピエトロ・イン・ヴァティカーノ）である。そして22番から南東方向アウレリアヌスの城壁の近くに11番、これがサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂である。そこから北北西方に向かって16番のサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂、そして16番から南西方向城壁の外に出たオスティア街道沿いに21番のサン・パオロ・フォリ・レ・ムーラ聖堂がある。フォリと言うのは「外」、レ・ムーラというのは「城壁」である。城壁の外のサン・パウロ聖堂という意味である。この4つが主要四聖堂ということになる。真偽のほどは定かではないが、さきほど述べた4つの聖堂、サン・ピエトロとラテラーノを直線で結び、またサンタ・マリア・マッジョーレとサン・パオロ・フォリ・レ・ムーラを直線で結ぶと、その交点がコロッセオ付近になる。そしてこの4つの聖堂を結ぶと十字の形をしているということになる。



図9 フォロ：正面奥右がセヴェルス凱旋門、左がサトウルヌス神殿

次に先ほどどのラテラーノ教会の東の方に9番のサンタ・クローチェ・イン・ジエルサレンメ聖堂がある。ジエルサレンメというのはイエルサレムのこと、その北東方向に13番サン・ロレンツォ・フォリ・レ・ムーラ聖堂があるが、これも城壁の外にある。さらに南南西方向、サン・セバстиアーノ門から城壁の外に出て旧アッピア街道沿いを南下したところに27番サン・セバスティアーノ聖堂がある。そしてこの3つの聖堂を合わせて、ローマ七巡礼聖堂と呼ばれていて、さきほど言ったように、ローマに到着した巡礼者たちは、ローマでまたさらにこの主要な7つを巡るということになる。浅香氏は7つの巡礼聖堂を順次参詣し、それぞれの聖堂の建設の経緯や歴史を知り、聖堂巡礼を通じてキリスト教に深い関心を抱くようになったと実体験を綴っておられる（『季刊文化遺産』17、4頁）。

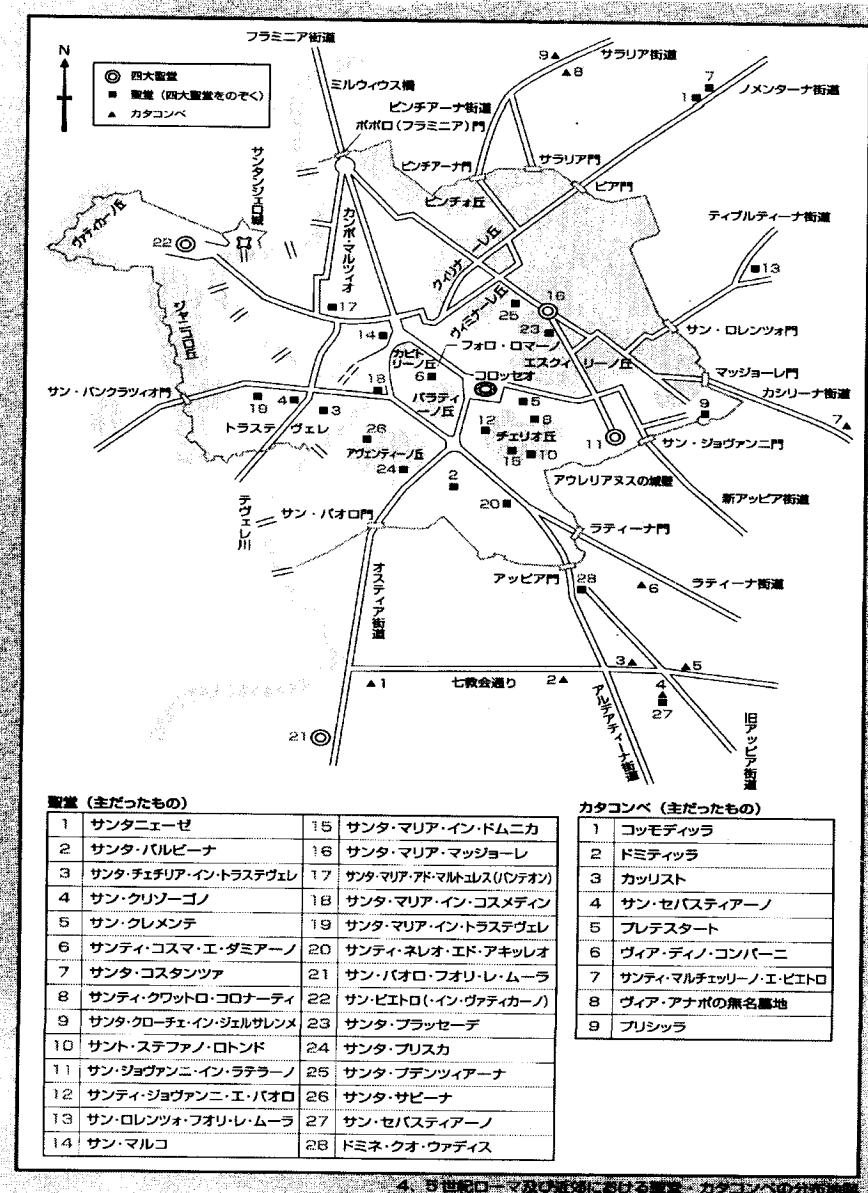


図10 4・5世紀ローマ聖堂・カタコンベ分布図（出典：『季刊文化遺産』vol.17）

### (1) サンピエトロ聖堂 (Basilica de San Pietro in Vaticano)

サン・ピエトロ聖堂は、イエス・キリストの弟子であった聖ペテロの遺体の上に造られた教会である。彼はもともとはガラリヤの漁師で、名はシモンといったが、イエスに歸依して弟子となった。イエスが十字架に架かる時、イエスを否定したが、キリストが十字架で処刑されて布教活動に入る。そしてローマに赴き布教をするが、ネロの迫害に耐えかねて、アッピア街道からローマを離れようとした時に、街道沿いの城門を出たところでイエスと出会い、「主よ、どこへ行き給うか」と尋ねたら「我、鞭打たれにローマに行かん」との言葉を聞いて思い直し、ローマに戻って自ら望んで十字架に逆さに架けられ、殉教したという有名な話がある。349年にコンスタンティヌス帝は元々墓地だったこの場所に聖堂を建て、アッピア街道沿いのカタコンベに埋葬されていたペテロの遺体を移して



図11 天國の鍵を持つ聖ペテロ像

安置した。それがサン・ピエトロ（旧聖堂）である。

1505年教皇ユリウス2世によって聖堂の改築が始まり、ミケランジェロによるクーポラ（円蓋）やバロックの巨匠ベルニーニ作の天蓋が作られ、その下のマデルノの主祭壇の下にペテロの墓がある。また大聖堂に入って右手にミケランジェロの「ピエタ」像がある。これはイエスが十字架に架けられ処刑された後、十字架からはずされたイエスの遺体を聖母マリアが抱きかかえているという像であり、こういう像をピエタという。ミケランジェロは生涯のうちに4体のピエタを作っているが、これは24歳の時から作ったといわれているものである。彼は90歳に手が届くところで亡くなったのだが、亡くなる直前に彫っていたロンダニーニのピエタはミラノにあるが、それとは全く正反対のピエタ像で衣服の襞など精巧な彫刻で、石の重量感を感じさせない逸品である。昔はすぐ近くで観ることができたが、今はかなり離れてガラス越しに観なければならない。その他クーポラ下の天蓋の右手にはそのつま先が信者の接触によって光っているカンピオ作の青銅のペテロ坐像がある。この時はミサのために、職員が中に入ってくれなかったが、普段は皆さんが足の先に触れるのでピカピカに輝いている。後陣にはベルニーニの聖ペテロの椅子とその背後の栄光の窓に精霊のシンボルである飛翔する白い鳩が描かれている。写真を見れば分かるように、聖堂内の造作や装飾は非常に豪華なもので、やはり教会は一つの舞台装置のようなもので、この世のものとは思われないようなこういう装置の中に入していくことで、参詣者の気分が高揚するのである。ヴァチカンは舞台装置の効果が緻密に計算されたところである。

外に出るとベルニーニによって築造されたバロックの最高傑作である4本1組となって弧を描く円柱に囲まれた楕円型の広場があり、その中央にはかつてガイウスとネロの競技場にあったエジプトのオベリスクが聳えている。

ちょうどクリスマスの時期なので、大きなモミの木をクレーンで広場に立てていた。この広場で教皇が祝福のミサをあげ、民衆で埋め尽くされた光景は、ミサに参加者もマスコミを通してそれを観る者にも感動と意識の高揚を与える。

## (2) サン・ジョヴァンニ・イン・ラレラーノ聖堂 (Basilica de San Giovanni in Laterano)

サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノには地下鉄を利用して訪れた。地下鉄の駅は城壁の外で、サン・ジョヴァンニ門を通って城壁に入った。普段は聖堂前にはテントは無いのだが、ちょうどクリスマスの時期に入ったので、クリスマスの市が開かれていた。

ラテラーノ聖堂はローマの四司教座教会の中で最



図12 サン・ピエトロ平面図（出典：『季刊文化遺産』、31頁）

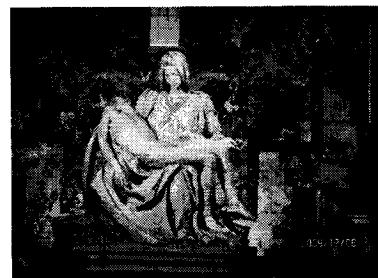


図12 ミケランジェロのピエタ

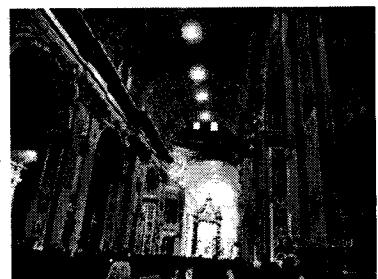


図13 サン・ピエトロ聖堂内部

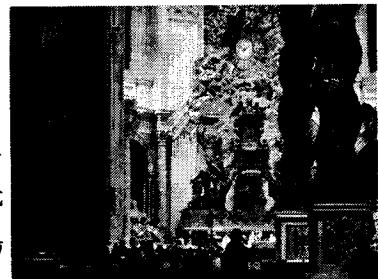


図14 聖ペトロの椅子

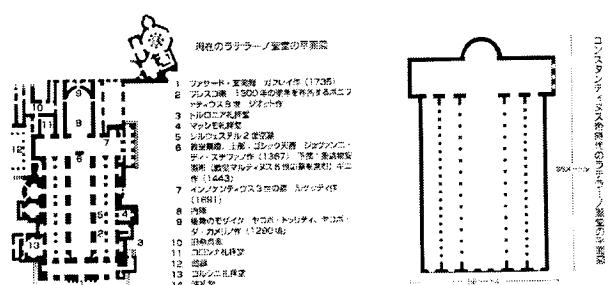


図15 ラテラーノ聖堂平面図（『季刊文化遺産』、39頁）

も古く、その名前はこの地に邸宅を構えていた名門ラテラーニ家に由来する。ネロの寵愛を失って土地を没収された領地は所有者の変遷を経て、コンスタンティヌス帝の所有となった。コンスタンティヌス帝はそれを司教ミルティアデスに寄進すると同時にバシリカ様式の世俗建造物を転用して司教座教会を設立した。その聖堂は教皇グレゴリウス13世によって洗礼者ヨハネ、福音書記者ヨハネの名を冠してサン・ジョバンニと呼ばれた。14世紀にローマ教皇が南フランスに幽閉されるまでは、ローマ教皇庁はサン・ピエトロではなくこのラテラーノ聖堂にあり、教会の中心的存在であり、由緒正しい聖堂であった。しかしこの聖堂は破壊と修復、破損と再建が繰り返され、現在の聖堂は1650年に建造されたものである。聖堂内は両サイド2列づつの側廊と中央に身廊の5廊を有する巨大な建物となっている。

図16は聖堂ファサードの上を飾る聖人たちの像である。中央にイエス、両側に洗礼者ヨハネと福音書記者ヨハネの像、その外側に教会博士像が聳え立つ。内部に入り、身廊の真正面に見えるのが教皇の専用祭壇で、その上部の聖龕には聖遺物として聖ペテロと聖パウロの頭部が収められているという。この教会の床面は大理石を組み合わせて作られた幾何学模様が見事である。また天井の装飾も壮麗な細工が施されている。右側側廊の正面には、結構な高さのところにインノケンティウス3世の棺が安置されている（図18）。ヨーロッパの教会に行くと、床下に聖人や有名人の遺体が埋葬されていて、我々の感覚ではその床を踏むのは忍び難いが、ヨーロッパの人たちにしてみれば、踏んだ方が「あなたのことを私はちゃんと覚えている」ということで、遠慮することなく踏みつけて歩いて構わないそうである。祭壇の背後にある後陣は金色に輝くモザイク画で使徒や聖人たちが描かれている。

洗礼堂前の広場には、エジプトから持ってきたオベリスクが建っている。解説書によれば、それは長い間巡礼者に目印の役割を果たしてきたものである。聖堂に隣接した八角形の形をした礼拝堂は4世紀に建てられ、17世紀にウルバヌス8世の命で大改修が行なわれた。以前訪れた時は洗礼堂の扉が開かれ、洗礼を受けるために子供の両親・親族一同が着飾って堂内に入ったのに便乗して内部を観ることができたが、今回は扉が閉ざされ、見学することはできなかった。

### (3) サンタ・マリア・マッジョレ聖堂(Basilica di Santa Maria Maggiore)

サンタ・マリア・マッジョレ聖堂は、古代ローマ時代のキュベレ神殿の場所に築かれ、改修を繰り返しながらも古代教会のバシリカ様式の原構造を残す唯一の建物である。この聖堂は聖母マリアに捧げられた聖堂の中でも最も規模が大きい。伝承によれば、4世紀に貴族で子供のなかったヨハンネス夫妻が全財産の寄進を考えていたところ、358年8月4日の未明に夢枕に聖母が現れ、教会を建てる場所を示すと

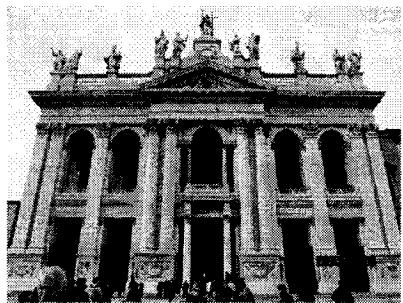


図16 ラテラーノ聖堂正面



図17 内部身廊と主祭壇

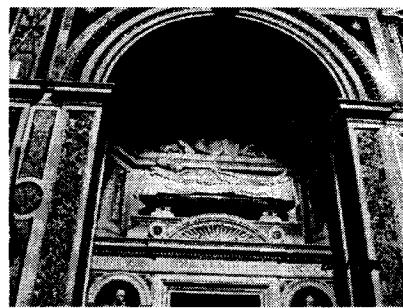


図18 インノケンティウス3世の棺

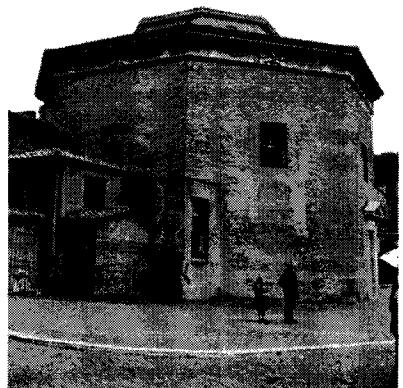


図19 八角形の洗礼堂

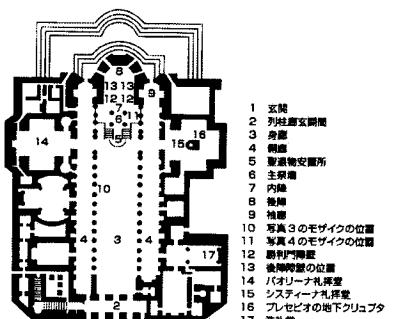


図20 マッジョレ大聖堂平面図42頁

告げ、同時に司教リベリウスにも顕現し、真夏にもかかわらず翌8月5日朝にエスキリーノの丘が雪に覆われたという。司教はそこが聖母の指示した場所と考え、雪の上に見取り図を書き、ヨハンネス夫妻が建築資金を拠出して建造に取りかかったという。それ故、別名「雪のサンタ・マリア」とも称される。豊田浩志氏（「サンタ・マリア・マッジョレ聖堂」『季刊文化遺産』vol.17, p.41）は、1960年代の側廊地下の発掘調査によって、司教リベリウスの教会は近くの別の場所に建てられたが、ローマ教皇使節として431年エフェソス公会議に出席して和解に尽力したシクストゥスは、聖母信仰の公認を記念してローマに聖母崇敬の大聖堂創建を思い立ち、現在の場所に改めて建築したと述べている。また後にアヴィニョン幽閉からローマに戻った教皇が荒廃したラテラーノ聖堂に代わり、ヴァチカンに移るまで一時教皇宮殿として使用したのがサンタ・マリア・マッジョレ聖堂であった。

聖堂正面のファサードの後の方に鐘楼が見える（図21）。朝夕この鐘楼の鐘の音が聞ける距離に我々が泊まったホテルがあり、その音を聴く度にローマにいることを実感した。いろいろな時代の様式が混在する華麗な正面ファサード入口から内部に入ると、2列の列柱により身廊と両側に側廊が並行し、列柱上部の壁面には旧約聖書の場面を描いたモザイク画やフレスコ画が並んでいる。床面の幾何学模様のモザイクも見事である。身廊正面には祭壇と天蓋があり、その奥には勝利の門の障壁と後陣のモザイク画

「聖母マリアの戴冠」などがところ狭しと描かれ、その壮麗さに暫し絶句する。聖堂を訪れた時はちょうど夕方のミサが始まる時で、いろいろな人が集まり始めたところであった。階層も人種も雑多で、中にはマントを着た3人連れ聖職学生も入ってきて、ミサを受けていた（図22）。朝夕繰り返されるミサに参集する民衆が敬虔に祈る様子を見て、改めて宗教が人々の生活に密着していることを感じた。

#### （4）サン・パオロ・フォリ・レ・ムーラ聖堂（Basilica di San Paolo fuori le Mura）

聖パウロは、ローマでの布教活動を行なって首を刎ねられ殉教した後、アッピア街道沿いに埋葬された。その後オスティア街道沿いにあるルキナという富豪の婦人の領地に改葬され、墓と思われる場所に主祭壇を設け、その上にバシリカを建てた。324年に教皇シルウェステル1世がこの聖堂を神に捧げる儀式を挙行した後、パウロを崇拜するキリスト教徒たちがその地に巡礼を行うようになったという。

コンスタンティヌス帝は、熱心なキリスト教徒であった母ヘレナや妹に影響されて、キリスト教に関連する地に次々に教会バシリカを建てたが、このサン・パオロ聖堂もその1つであった。古代にはオスティア門、中世に入るとパオロ門と呼ばれていた城門を出たオスティア街道沿いにあったこの聖堂の名称は、

「アウレリアヌス帝の城壁の外のサン・パオロ聖堂」の意味であるが、それはコンスタンティヌス帝により聖パウロの墓の上に建造された。386年にはさらに規模を拡大して再建が行われた。中世に入り、聖人や殉教者に所縁の地を巡る巡礼が盛んになると、多くの巡礼者がこの聖堂を訪れた。9世紀に一時イスラーム

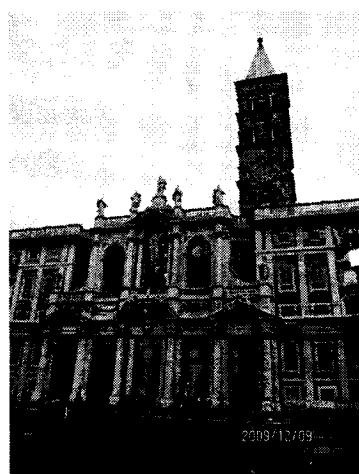


図21 マッジョレ聖堂正面



図22 マッジョレ聖堂内部

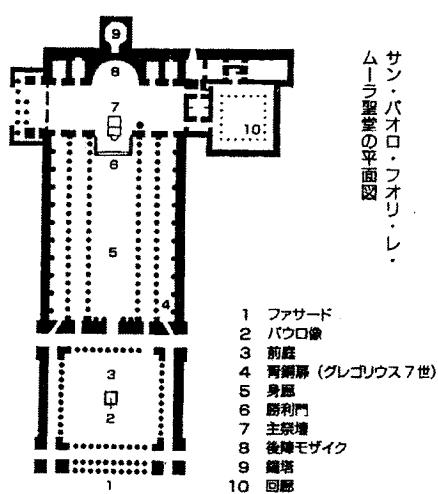


図23 サンパウロフォリムーラ聖堂  
（『季刊文化遺産』、45頁）

の侵入、略奪もあったが、歴代教皇により修復が行われた。しかし1823年に火災でバシリカの大部分が焼失したが、教皇ピウス9世らによって現在の聖堂が復興された。

このように建物自身は火災等々で19世紀に再建されたものだから比較的新しいのだが、教会自身は聖ペテロに並ぶ聖パウロの聖堂ということで、ここは由緒正しい聖堂ということになっている。地下鉄の駅を降りて、鐘楼を目指して歩いていくと、聖堂の後陣側の入口に辿り着く(図24)。図23でいうと左側の入り口のところになる。そこから中に入ると、右手にあるのが主祭壇になる。聖堂内は身廊とそれ左右2本の側廊があり、身廊奥のゴシック式の天蓋の下が聖パウロの墓がある主祭壇である(図25)。

後陣上部には祝福するキリストと使徒たちが描かれたビザンツ風のモザイクが施され、また身廊側の列柱上部の壁面にはパウロの生涯や聖書の場面、ペテロ以来の歴代教皇の肖像モザイクが描かれているが、残念ながらゆっくり観る時間はなかった。主祭壇手前の「勝利の門(凱旋アーチ)」のモザイクもイエスを中心に見事な場面が描かれている。バシリカから手入れの行き届いた前庭の回廊に出ると、その中に剣を持つ聖パウロの彫像がある。その背後のバシリカのファサード壁面は金色に輝くモザイク画で埋められ、にここまでイエスを中心に福音書記者やパウロが描かれている(図26)。

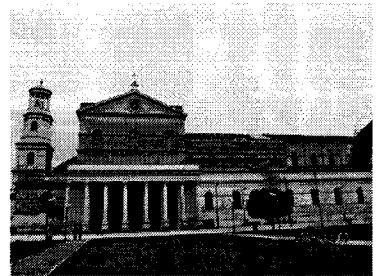


図24 聖堂西側と鐘楼



図25 聖堂内部(勝利門と主祭壇)



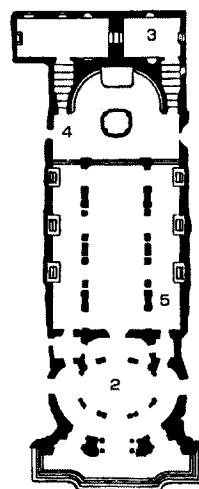
図26 前庭回廊から聖堂を臨む

#### (5) サンタ・クローチェ・イン・ジェルサレム( *Basilica di Santa Croce in Gerusalemme* )

サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂から東方向に歩くと間もなくサンタ・クローチェ・イン・ジェルサレム聖堂のバロック風ファサードとロマネスク風鐘楼がみえてくる。コンスタンティヌス皇帝の母ヘレナが4世紀初め聖地エルサレム巡礼をした際にローマに持ち帰った聖遺物を安置し、崇敬するために息子のコンスタンティヌス帝が聖堂を創建したといわれている。そこにはイエス・キリストの受難を示す聖遺物が多数保存されている。例えばキリストが磔刑された十字架の木片の一部や荊冠の棘、肢体に打たれた釘、ゴルゴダのイエスの墓の土などが保管されているとのことである。それ故サンタ・クローチェ聖堂は初期には聖ヘレナ聖堂とか聖エルサレム教会と呼ばれた。教皇のアヴィニヨン幽囚の間一時荒廃したが、18世紀半ばに教皇ベネディクトゥス14世らの修復により今日見られる姿に改修され、バロック風ファサードが付け加えられた。ファサード上部には福音書記者の両端にヘレナとコンスタンティヌスの彫像が立っている。また柱廊玄関はクーポラを持つ独特の楕円形柱廊をなしており、一見の価値がある。内部は3身廊に分かれ、後陣奥には十字架の礼拝堂や聖ヘレナ礼拝堂があるが、当日は宗教団体のミサが行われ、観光バスを連ねて多数の信者で聖堂内部は満杯状態で、見学す



図27サンタクローチェ聖堂正面



サンタ・クローチェ・イン・  
ジェルサレム聖堂の平面図

- 1 ファサード
- 2 柱廊玄関
- 3 聖ヘレナ礼拝堂
- 4 聖遺物礼拝堂への入口
- 5 ロマネスク風鐘塔

図28 平面図(『季刊文化遺産』、47頁)



図29 ミサが行われている聖堂内部

ることはできなかった(図29)。

#### 6) サン・ロレンツオ・フォリ・レ・ムーラ聖堂(Basilica di San Lorenzo fuori le Mura)

旧城壁の外側で、現在ローマ大学キャンパスのある大学都市のなかを通り過ぎるとサン・ロレンツオ・フォリ・レ・ムーラ聖堂に着く。この聖堂は258年ヴァレリアヌス帝の時に鉄格子の上で焼き殺された助祭ロレンツオ(ラウレンティウス)の遺骸を納めたカタコンベの墓所の上に、330年頃コンスタンティヌス帝によって建てられた。その後殉教者崇拜の気運の高まりにより、聖遺物を直接拝覗しようとする巡礼者が参詣するようになり、6世紀末に改築された。内部は旧聖堂の玄関間や勝利門のモザイク、内陣の側廊や古代神殿から運ばれた壮麗なコリント様式の円柱、祭壇と天蓋など見るべきものは多く、期待して出掛けたが、当日は訪れた時間が遅かったので口は既に鍵がかかっており、残念ながら内部に入ることはできなかった。

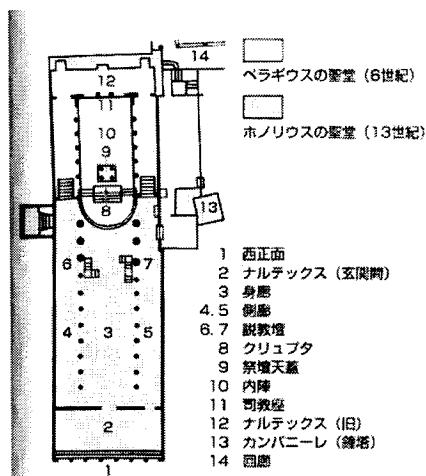


図30 サン・ロレンツオ聖堂平面図(出典:『季刊文化遺産』、48頁)



図31 サン・ロレンツオ聖堂正面と鐘楼



図32 サン・ロレンツオ聖堂

#### (7) サン・セバスティアーノ聖堂 (Basilica di San Sebastiano)



図33 サン・セバスティアーノ聖堂正面

使徒ペテロとパウロの遺体を一時カタコンベに埋葬していた場所に、4世紀前半に建てられた聖堂であるが、その後3世紀に皇帝ディオクレティアヌスの近衛兵の若い将校であったセバスティアヌスがキリスト教徒の兵士を援助した廉で杭に縛られて矢責めの刑に処せられた。彼は死んだものと放置されたが、イレネの介護で蘇生し、皇帝にその非を訴えたが再び逮捕され、今度は棍棒での殴打刑に処せられて殉教し、聖堂地下のカタコンベに埋葬されたといわれている。疫病はアポローンの矢によってもたらされる信じていた当時の人々にとって、セバスティアーノが矢責めにあっても命を失わなかつたことから疫病の予防・撃退の聖者として崇められた。

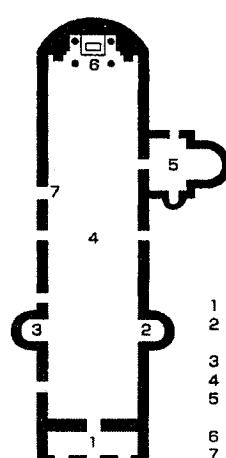


図34 平面図(出典:『季刊文化遺産』、51頁)

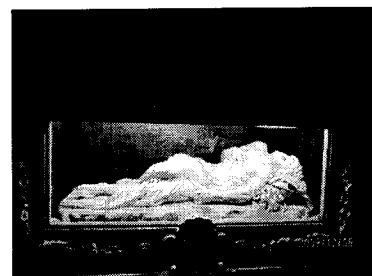


図35 サン・セバスティアーノ殉教横臥像

4世紀に建てられた聖堂が1612年ボルゲーゼ枢機卿の寄進により改築された。内部は単廊式聖堂で、左側礼拝堂はセバスティアヌスに捧げられたもので、祭壇の下のガラスケースには矢の刺さった聖者セバスティアーノの横臥像が納められている。その地下には遺体が埋葬されているが、今回は教会に隣接するカタコンベの入口のドアに鍵がかかっており、誰もおらず、入場することが叶わなかった。また右側礼拝堂には「イエスの足跡」と称される石の聖遺物と聖者が殉教した時に射られた1本の矢が納められている。

## まとめ

駆け足で古代からのローマ巡礼について概観して来たが、ヨーロッパ各地からローマにやって来た巡礼者たちはいろいろな願いを抱えて以上の七聖堂を経巡った。天国への鍵を持つ聖ペトロの聖遺物が保存されているサン・ピエトロ大聖堂をはじめ、多くの聖人、殉教者を偲ぶことができる多数の聖遺物を持つローマへの巡礼は、現在でも世界各地のキリスト教徒（ローマ・カトリック教徒）にとって大きな希望であろう。

調査報告会では時間の都合で4つの主だった聖堂を中心に紹介したが、今回ローマを訪れて感じたことは、ローマに限らずヨーロッパの聖堂、教会は大体そうであるが、ゴシック様式に象徴されるように巨大で豪華に造られていることである。これは日本の寺院にも共通することであると思うが、日頃そんなに豊かな生活をしていたわけではない当時の巡礼者は、長い道のりをひたすら聖者に会うために祈りながらローマを目指して徒歩でやってきた。やっとの思いでローマに辿り着き、聖堂・教会に立った時、自分の生活とかけ離れた莊厳な独特の雰囲気の中で、やはり気分をぐっと高揚させたのではないか。なおかつ中世の間は、教会を通じてのみ天国に行けるとの教えによって、巡礼を通して来世での安寧をひたすら願って神との結びつきを強めていく。このように来世の安寧と現世での利益を願いながら、巡礼者たちはこの7つの聖堂を巡ったのではないかと思う。昨年12月に調査に出かけ、まだ準備が十分にできておらず、単なるローマの七巡礼聖堂の紹介に終わったが、私の報告は以上にさせていただきたい。

## 参考文献

浅香正監修「特集ローマ古寺巡礼」『季刊文化遺産』VOL.17、2004年に所収の執筆者と題目一覧

- ・浅香正、「初期ローマ教会の形成と巡礼」
- ・新田一郎、「コンスタンティヌス帝とキリスト教」
- ・勝國興、「聖堂建築の発展」
- ・浅香正、「サン・ピエトロ大聖堂」
- ・新田一郎、「サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂」
- ・豊田浩志、「サンタ・マリア・マッジョレ聖堂」
- ・松本宣廊、「サン・パオロ・フォリ・レ・ムーラ聖堂」
- ・酒枝徹意、「サンタ・クローチェ・イン・ジェルサレンメ聖堂」
- ・勝國興、「サン・ロレンツォ・フォリ・レ・ムーラ聖堂」
- ・浅香正、「サン・セバスティアーノ聖堂」

L.ベネーヴォロ、『図説都市の世界史1 古代』相模書房、1983年

三浦朱門、辻成史、若山映子『世界の聖域12 聖都ローマ』講談社、1979年

小畠紘一、『ローマの教会巡り』誠文堂新光社、1991年

歴史学研究会編、『地中海世界史4 巡礼と民衆信仰』青木書店、1999年

エドワード・ノーマン、『図説ローマ・カトリック教会の歴史』創元社、2007年

地球の歩き方編集室、『A10地球の歩き方ローマ2009-2010』ダイアモンド・ビック社、2009年

L.J.Taylor et.al.eds., Encyclopedia of Medieval Pilgrimage, Brill, 2010

ウィキペディア Wikipedia <http://ja.wikipedia.org/wiki/サン・ピエトロ大聖堂>